

# 第53回全日本教職員バドミントン選手権大会 レフェリー報告

派遣レフェリー  
新木 恵一

(公財)日本バドミントン協会の主催する第一種年次大会の中でも、50回を超える歴史を刻んでいる大会は数少なく、そうした大会に関われることはレフェリーにとっても貴重な体験でありました。

今回は38年ぶりの東京開催となり、都バドミントン協会並びに都教職員バドミントン連盟の主管により実施されました。特に運営主体となった都教職員連盟の役職員の皆さんは開催が決まって以来、大会運営に関する研鑽を重ね、周到な準備をしていただき心から感謝申し上げます。特に都内という立地条件から会場確保にご苦労をなされ、4会場を使つての大会となり、運営は勿論、備品類等の手配まで事細かに、なおかつ計画的に準備を重ねていただきました。

さて、この大会の大きな特徴は、何よりも大会前日に選手役員の参加する「研修会」が設けられていることです。そこでは講師から生徒を指導する立場でもある選手等(連盟の先生方)に対し喫緊の課題などを提供し、共に考えるという他の大会には見られない取り組みがありました。また、選手宣誓で高らかに謳ったのは「他の手本となる大会である。」ということであり、この大会の役割の大きさを改めて認識しました。

さて、実際の大会運営及び試合であります。やはり変則的4会場での運営の厳しさを一部で感じられました。例えば、備品の手配や救護員の手配等に若干の齟齬が見られ、結果的には役員の迅速なフォローにより事なきを得たが、忙しい中であるからこそ再三のチェック体制が必要であると感じました。また、派遣審判員の方々も、それぞれの地域のリーダー的な方であるとのことでしたが、ごく一部の方についてはさらなる研鑽が必要ではないかと感じる面も見られ、この大会を契機により一層の審判技術の向上を期待いたします。

次に、試合に臨む選手・役員についてですが、大半の方が大会の趣旨を十分理解しマナー的にも良好であると感じました。しかし、これもごく一部ではありますが、新たなルール(特にコーチ席の服装・態度、試合中の態度等)に欠けている方がいたことも否定できません。

少し厳しいことを述べましたが、これも日体協加盟の幾多の競技団体の中でも数少ない世界選手権の優勝・準優勝競技であるバドミントンは、これから更に注目されるであろうことから、教職員連盟の皆さんがお手本となって競技力やマナーの向上に更なるご尽力をいただきたいがためであり、お許しいただければ幸いです。

結びに、都教職員連盟の皆さんに大きな拍手を送り、また大会に係わった全ての皆さんに心から感謝申し上げます。レフェリー報告と致します。